

第四章 近世

第一節 近世社会の形成

一 黒田時代の犀川地方

(一) 太閤権力と郷土

黒田孝高の downward

豊前・筑前の支配をめぐって毛利氏と争ってきた大友宗麟・義統父子は、中国へ版図を拡大してきた織田信長と連携して、毛利氏を東西より挟撃する策に出た。これに対して、毛利氏は島津氏や龍造寺氏と結んで大友氏を圧迫した。しかし、本能寺の変後、羽柴秀吉が毛利氏と和睦し、これを臣従させると、秀吉は毛利輝元に、大友氏との和睦を命じ、天正十四年（一五八六）二月、和睦が成立し、その御礼をも兼ねて、大友宗麟が大坂城を訪れ、秀吉に九州出馬を請うた。

毛利・大友の和議で、多年、大友氏に反旗を掲げてきた筑前の秋月種実、豊前の高橋元種らは島津氏に接近し、島津義久の北上を請い、綿密な連絡をとって大友氏を牽制した。

四国の長宗我部元親を屈服させた秀吉は、天正十四年四月十日、毛利輝元ら中国勢へ、九州出兵を命じ、黒田官兵衛（孝高、のち如水）と安国

寺惠瓊を中国衆の検使として先発させ、豊前や肥前で人質を取り置き、門司・麻生・山鹿・宗像の城へ中国勢と兵糧を込めて、立花・宝満城への通路を確保し、一日の行程ごとに関白殿下の御座所を築城することなどを指示した。

七月二十日には、長宗我部元親・仙石権兵衛（秀久）ら四国勢が豊後へ向かって出船した。

六月、島津義久は北上を決意し、肥後八代に進出。その先鋒を命ぜられた島津忠長・伊集院忠棟が筑後高良山に布陣し、七月電撃的な勢いをもって、五箇山の筑紫広門を降し、太宰府の岩屋城（高さ二七八ぶ）を五万の大軍をもって包囲した。

八月三日、秀吉は岩屋城の高橋紹運と立花城の立花統虎へ、黒田官兵衛・宮木宗賦を下向させるから、それまで少しも落度なきよう薩摩勢を繋ぎ留めておくよう指示した。しかし、既に七月二十七日、岩屋城は陥落し、高橋紹運ら七〇〇余は壮烈な戦死を遂げていた。薩軍も戦死者三〇〇〇を超す犠牲を払った。高橋紹運は立花城督であった吉弘鑑理の次子で、既に永禄十三年主家大友家に反逆した宝満城督高橋鑑種が小倉城に移ったあと高橋家を嗣いでいた。吉弘鑑理の死後、立花城督となった戸次道雪には、男子がなかったため、紹運の子が婿となって、立花統虎と称していた。

島津勢は八月六日、宝満山の高橋統増（紹運の子）を降し、さらに北上して立花城に迫ろうとしていた。この報に接した秀吉は、八月十四日、黒田官兵衛・毛利輝元らを急がせ、立花城救援に向かわせた。

八月十六日、国元を発った小早川隆景・吉川広元ら中国勢万余は、続々と関門へ集結した。これを知った島津勢は後方遮断を心配して撤退

を決し、肥後へ退いた。立花統虎は城を出て追撃し、たちまち高鳥居城（須恵町）の星野鎮豊を斬り、岩屋・宝満城を奪回した。九月に入って、黒田孝高・宮木宗賦・安国寺恵瓊が立花城に入り、中国勢を同城に籠めて、太宰府までの太閤殿下の通路を確保する目的を立てた。ついで、門司関から豊後へ至る通路を確保するため、大友氏と連絡をとりながら、豊前平定に移った。

馬岳城陥落

天正十四年（一五八六）十月三日、大友義統は千石秀久ら四国勢の応援を得て、豊前東部四郡の制圧を命ぜられたらしく、滅亡した安心院氏の居城龍王城（安心院町）に入り、千石秀久は田原紹忍の拠る妙見岳城（院内町・宇佐市境）に入り、島津氏に与同した国人たちの討伐を始めた。

既に門司に上陸した毛利輝元をはじめとする中国の大軍が高橋元種の端城小倉城を包囲すると、前々より毛利氏に支援されていた国人たちが続々と出頭し、人質を差し出して服従を誓った。馬岳の城主長野三郎左衛門をはじめとして、山田大膳・八屋刑部（豊前市）・広津鎮種（吉富町）・時枝武蔵守・宮成吉右衛門（宇佐市）らが小早川隆景を頼って降礼してきた。秀吉は十月十日、検使黒田らの報告を受けて当知行安堵の書状を彼らに与えた（『時枝文書』・『黒田家譜』）。

小倉城は城主が降を請うたので助命し、高橋元種も助命を請うたというが、香春岳城引き渡しにまでは至らなかったらしい。

小倉城に入った黒田孝高は、筑前の麻生・宗像氏と中国勢に、秋月氏の端城帆柱（八幡西区）・剣岳（鞍手町）・浅川（八幡西区）・古賀（水巻町）の諸城を攻略させた。

大友義統・仙石秀久らの豊前出張の虚を突いて、大友一族の入田義

実・志賀道雲らの案内で島津家久の大軍が豊後に侵入し、破竹の勢いで諸城を攻略し、大分郡に迫った。

大友義統らは急ぎ府内に戻り、これを迎撃せんと、鶴ヶ城（大分市戸次）に出陣し、若い仙石秀久の強引な作戦のために長宗我部元親の子信親を戦死させるような敗北を喫した（十二月十二日）。大友義統は府内に撤退したあと、高崎城に移り、さらに豊前の龍王城に入り、千石秀久は妙見岳城に移った。長宗我部元親は伊予日振島へ逃れた。

この大敗で、太閤の面目を失った秀吉は、自分が豊前出張を命じたことを忘れて、仙石秀久の作戦の失敗を責めて、讃岐一国の所領を没収して、秀吉の蔵入地とし、尾藤左衛門に奉行させ、他の部将たちへの見懲らしとした。

天正十四年十一月、小倉城から苅田松山城に入った黒田孝高・小早川・吉川軍は馬岳城に軍を進めて、高橋元種の端城である宇留津城（椎田町）の加来新外記を包囲、攻撃して二〇〇〇余を斬り、残った男女を磔にして、上方勢の意気を誇示した。ついで、香春岳の端城障子岳城（勝山町）を降し（十一月十五日）、高橋元種の籠る香春岳を包囲して、三の岳、二の岳を攻略して元種を降伏させた（十一月二十四日）。秋月種実も降伏を申し出たが、古所山城明け渡しの問題が整わないまま年を越した。

太閤の御勅坐

岩石城（添田町・高さ四四六尺）には、秋月種実の部将熊井越中守久重が籠城していたが、秀吉の威力を示すために降伏を許さず、包囲したまま、秀吉の下向を待つことになった。

天正十五年に入ると、黒田孝高は正月末日、宇佐郡の萩原民部丞ら豊

前の国人に、秀吉着国のとき、必ず出頭して挨拶し、人質を差し出すよう伝えた。三月一日、京都を出発した秀吉は、三月二十八日、小倉城に入り、軍評定して、軍を二手に分け、秀吉の弟大和・大納言橋本長右衛門と、黒田孝高・毛利・小早川・吉川・長宗我部等八万人が豊後を通って日向へ、秀吉は近畿・北陸等の勢一〇万余をもって筑前・筑後・肥後へ向かうことになった。

翌三月二十九日には、馬岳城に泊まった。この時、彦山座主舜有は使者を送って降伏を願ったが許されなかった。四月朔日、田川郡伊田原（戸代山カ）に陣し、岩石城攻撃を見物した。この城の攻略を申し出たのは前田利長・蒲生氏郷らで、一日で攻め落として、一人も残さず首を刎ねて、上方勢の強さを見せつけた。翌日、大隈（嘉穂町）の城に入ったところで、彦山座主自ら出頭して命乞いして赦され、秋月種実も剃髪して降を請い、島井宗室の家宝の茶入「檜柴」を強奪して差し出したので、特別に命を赦された。秋月城に入った秀吉のもとへ、龍造寺をはじめとして、筑紫・草野・小代・立花・原田・麻生・杉・高橋・長野・安心院・城井・山田・仲間・八屋・広津・宮成・時枝等の武士が出頭し降礼を行った。この後、秀吉は順調に南下し、島津義久の降を容れ、博多へ引き揚げ、六月、九州の知行割りを行った。

豊後に向かった黒田孝高らは、島津勢が豊後から撤退していたので、これを追って日向に入り、やがて秀吉軍に薩摩で合流していた。

(二) 黒田孝高の入封

黒田孝高の父は小寺官兵衛といい、播磨国姫路付近の国人で、織田信長に仕え、孝高は羽柴秀

吉が姫路城に入った天正五年（一五七七）ごろより秀吉に仕え、のち、近江国黒田の先祖の地を姓として黒田官兵衛孝高と称することになった。天正八年、播磨国揖保郡に一万石を与えられ、同十二年に同国安栗郡一職（数万石）を与えられていた。

今度、御恩地として、豊前国において、京都・築城・中津・上毛・下毛・宇佐六郡の事、宛行われおわんぬ。但、宇佐郡の内、妙見・龍王両城の当知行分はこれを相除く、其外は全く領知せしめ、いよいよ奉公忠勤を抽すべきの由候也

天正十五
七月三日 秀吉（朱印）

黒田勘解由とのへ（原漢文）

秀吉は、大友氏が籠城していた龍王・妙見両城とその城料の地を蔵入地（直轄地）として除き、豊前東部六郡を孝高に与え、毛利氏がかつて支配した高橋元種の旧領企救・田川二郡を森（毛利）宅岐守勝信に与えた。このあと、直ちに検地が行われ、知行石高が算出された。関ヶ原合戦後入国する細川氏の記録によると、黒田氏が一二万石、森氏が六万石、妙見・龍王城領が一万石で、豊前一国は一九万石であった。

黒田孝高は、馬岳を居城としていたが、秀吉の指示を受けた大納言秀長の命令によって、天正十五年五月ごろより築城していた下毛郡の中津川へ移り住んだ。

なお、太閤権力に屈服した豊筑の国人たちは、次のように所替えさせられた（『九州治乱』等による）。

国人名	旧領	旧居城	新領	新城
秋月三郎種長	筑前・豊前	占処山	日向国児湯郡千町	財部
高橋九郎元種	企救・田川郡	香春岳	日向国	延岡

城井弥三郎朝房 長野三郎左衛門 原田五郎信種	築城郡 京都・仲津郡 筑前怡土郡	寒田 馬岳 高祖	伊予国今治 上筑後、のち肥後国 同右 同右
------------------------------	------------------------	----------------	--------------------------------

(三) 太閤検地と豊前国人一揆

黒田氏の検地

天正十五年（二五八七）七月、豊前東部六郡を与えられた黒田孝高は、宇佐郡の時枝武蔵守の城で「隠田・畝ちがへ等仕る者、罪科に行うべし」など、三か条の触れを出し、検地を始めた。時枝武蔵守は、秀吉から、検地のあと、一〇〇〇石分を六郡内から与えるから、孝高の「与力」となれという宛行状をもらった。

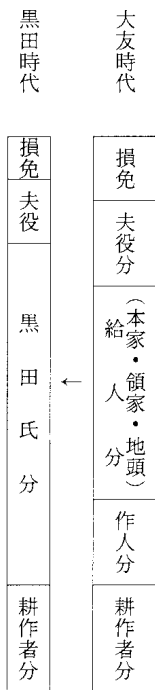
黒田氏の検地が、仲津郡でどのように行われたか知ることはできないが、宇佐郡の元重村や、高家村の検地帳写に「天正十五年八月十日御検地」「天正十五年九月廿七日」とあることから、黒田氏が七月三日付で知行宛行を受けて、すぐ検地に取りかかったことがわかる。

元重村の検地帳の一部を紹介し、黒田検地の特徴を考えてみよう。

竹の下	六畝	倉納	三斗六升	次右	兵部
同	七畝	蔵納	四斗式升	三郎右左近	
同	耆反	くら納	五斗	次右	兵部
同	耆反六畝廿歩	くら納	耆石	同	同人
同	同はた	くら納	耆斗六升	同	同人
同	式畝廿歩	くら納	耆斗	左介	左介
同	すみた	四畝拾歩	くら納	式斗六升	孫二郎
同	もりかき	耆反	くら納	六斗	左介
以上三石六斗					

ここでは、太閤検地の特徴である町反畝歩制と一反〓三〇〇歩で、面積、石盛、名請人が記されているが、石盛は田が五斗六斗、畑が三斗七斗五斗四斗で、文禄検地のように、上田一石五斗・中田一石三斗・下田一石一斗・下々田見計、上畑一石二斗、屋敷一石二斗の品等と高い石盛は見られない。太閤検地初期のもので、現地の実情に即応した基準で検地帳が作成されていたことがわかる。史料中の兵部は安芸（田畑六町余〓三六石余）につく四町七反余（三〇石余）の名請人となっており、屋敷内に名子・下人を住まわせる中世名主元重兵部丞鎮頼、安芸はその叔父安芸守統清のことと思われる。国人元重氏はこうして農民身分に固定されることになったのである。それにしても、四町七反余も名請する兵部の肩書の次右（次郎右衛門の略）とはどのような農民であろうか。

元重村の石高三五六石余は、細川時代の元和八年（一六二二）の人畜改帳では九五六石と三倍近い増高となっていることを考えると、黒田氏の検地は年貢高に近いもので、この石盛より損免分・夫役分を考慮して、物成（納税率）を決定したと思われる。黒田検地で、農民の負担は次のように大きく変化したのである。



夫役について、黒田氏が慶長十七年（一六一二）筑前国で定めた掟を参考にすると、

- 一、給人方の百姓夫任候儀、人別、耆ヶ月三日宛召仕うべき事
- 付福岡普請ニ百姓罷出候時ハ右の人遣い停止の事

一、蔵入百姓は、人別々ヶ月ニ日宛、代官が召仕うべき事
と、夫役の無制限な収取を禁じている。豊前時代でも、この程度の比較的軽い夫役を徴して、生産力の低い地域の農民の生活維持に配慮した。

国人一揆

俗書には、黒田長政が、中津の城作りで国人から夫役を徴したため、各地に一揆が蜂起したという。

天正十五年十月から十二月にかけて、肥後国で阿蘇氏ら国人の一揆が起り、熊本城を包囲したため、黒田孝高ら九州の大名がその鎮庄に向いている時、肥前や豊前でも国人の一揆が起った。田川郡の岩石城、築城郡の城井鎮房、上毛郡の山田大膳・山田常陸介・如法寺・緒方、下毛郡の野仲鎮兼・福島佐渡守・賀来統直・犬丸越中守・池永重則・仲間統種、宇佐郡の益永・辛島・大神等がそれぞれ古城に桶籠って検地に抵抗した。このうち、仲間統種は早く降伏して、黒田勢を山田城に導き、山田大膳を滅ぼした功勞で黒田家臣に取り立てられた(『黒田家譜』)。
これらの国人は、島津・秋月方として行動したため、黒田孝高や秀吉への降札が遅れ、当知行の安堵が得られないまま、検知によって、農民身分に格付けされる屈辱を受け、さらに築城人夫や年貢収納にあたって衝撃的な重税に驚愕し、かつてない地域的な纏まりを示すことになった。

この報告をうけた豊臣秀吉は、直ちに、吉川・毛利氏ら中国勢をして黒田長政、毛利勝信を応援させ、ほぼ二か月で討伐した。

(四) 宇都宮氏の滅亡

宇都宮一族の滅亡

城井鎮房だけは城井谷鬼ヶ城の要害に桶籠って、黒田長政・吉川勢を苦しめ、和睦の手段を選ばせた。のち鎮房は中津城で誘殺され、その子朝房は肥後の木葉で害され、父長房は寒田の里で攻め殺され、娘千代姫も広津川原で磔にされたという。宇都宮城井氏は秋月種実屈服後に秋月で秀吉に降札をとり、伊予に所替えを命ぜられたが、これを受けず、毛利勝信の所領田川郡柿原の地に移り、毛利氏の家臣となっていたという。

宇都宮氏の滅亡は、秀吉の命令によって誅滅されたと考えられる。このころ、切腹させられた佐々成政が、秀吉の当知行安堵を得た国人たちに、検地後も給地を渡さなかったのが一揆の原因であると述べて、他部将に対する見懲らしとし、肥後の一揆を起こした国人を皆殺しにしたのも、九州各地で発生する検地拒否の行動に対する大閥権力の毅然たる態度を見せつけるものであった。

(五) 朝鮮出兵

黒田氏の朝鮮出兵

全国統一を達成した秀吉は、つづいて唐入りに踏み切り、文禄元年(一五九二)、一五万余の兵を渡海させた。黒田孝高は、前年より兵船の準備をさせられ、前進基地である名護屋城の築城を命ぜられ、その子長政が、五〇〇〇人の軍役と、兵糧二万石を手当てして渡海した。豊前の武士で、黒田家臣となつた仲間統種(黒田六郎右衛門)は一〇四人、時枝平太夫は一〇二人の割り当てを受けている。恐らく、半数は領内の農民が陣夫として兵糧・武器

の運送に従事させられたであろうから、軍民ともに苦勞が絶えなかったろう。

黒田長政は、小西行長の釜山浦上陸について、西隣の金海に上陸、二週間で京城に侵入した。その後、北の平壤を攻撃する小西行長を支援するため、大友義統を誘って平壤に突入した。その後は、京城と平壤の連絡路確保のため、白川に在陣した。やがて、明より李如松が兵五万を率いて朝鮮軍に加わり、計二〇万の大軍をもって平壤を包囲した。一万八〇〇〇ばかりで楯籠る小西行長を支援しても勝ち目がないと判断した大友義統は、鳳山の城を出て京城まで撤退した。

黒田家臣小河伝右衛門は竜泉の砦を守り、小西行長軍の撤退を待ち、黒田長政の援軍を得て、撤退軍の殿を務めた。このため、大友義統は秀吉の激怒を買い、豊後一国を没収され、小河伝右衛門は蔵入地となっていた妙見・龍王城領一万石を与えられたが、渡海中に病死した。

その後、京城で、小西行長や三奉行と明使沈惟敬らとの間に和議が調い、日本軍が帰国したが、黒田長政は殿を務めたあと帰国した。

慶長二年（一五九七）、秀吉は朝鮮との和議を破り、再渡海を命じた。渡海軍一三万余のうち、黒田長政は五三〇〇〇人の割り当てを受けた。渡海した日本軍は海辺に城を構え、黒田如水も渡海して、朝鮮の治政に当たった。しかし、間もなく、秀吉が病死したので、慶長の役は中止された。

(六) 関ヶ原合戦と郷土

黒田氏の筑前移封

黒田如水は、朝鮮出兵中から石田三成と不仲で、秀吉の死後、徳川家康に接近し、家康の養

女を長政の嫁として迎え、家康方として行動した。関ヶ原の合戦が始まると、留守を預かった黒田如水は三六〇〇余の兵を集めて、別府石垣原の合戦に、大友家再興を賭ける大友義統を破り、西軍に与した国東の安岐城・富来城を降し、隈（日田）・角牟礼（玖珠）等の諸城を請け取り、小倉・香春両城を請け取ったあと、久留米・柳川等の城を請け取って、薩摩境まで兵を進めて、島津氏の降伏を待った。

それらの功勞によって、黒田長政に筑前一国が与えられ、博多の名島の城へ移ることになった。

二 細川時代の犀川地方

(一) 細川藩の成立

細川氏の入国

細川氏は、三河国（愛知県）細川が本貫で、室町幕府の管領の一族である。細川忠興は、永禄六年（一五六三）十一月十三日に細川藤孝（幽斎）の子として京都に生まれた。

慶長五年（一六〇〇）二月、徳川家康は、細川忠興に、大坂屋敷の台所料として豊後の速見郡・杵築のうち六万石を与えた（「松井」）。忠興は、家臣松井康之・有吉立行を九州へ派遣し、この領地を支配させた。

同年九月、関ヶ原の役で覇権を確立した家康は、その戦後処理として豊臣系外様大名の改易・転封を強行した。豊前の規矩・田川の二郡を領し、小倉城にいた毛利勝信は、西軍に味方したため除封になった。豊前六郡を領し、中津城にいた黒田長政は、東軍に属して活躍したため、筑前一国五二万三〇〇〇石を与えられ、十二月十一日、父孝高とともに名島城（福岡市東区）に入り、そして、同七年、築城なった福岡城に